藤原京左京八条三坊の調査
―第202次

調査の概要　本調査は、市道（国道165号小山線）の一部付替工事にともなう、事前の発掘調査である。調査地は香具山の西南麓にあたり、南東には大官大寺が位置する（図128）。当地は、奥山の集落がある東の丘陵地と小山の集落がある西の丘陵地とに挟まれた、谷状の低地となっている。飛鳥に水源をもつ中の川が大官大寺付近を北西に流れ、香具山の西麓を北流するが、当地はその旧流路上にあたる。

周辺における既往の調査では、現道路下の調査成果が参考となる。西側の藤原宮第27-7次調査では、藤原京期と思われる幅６ｍ前後の斜行大溝SD2690、弥生時代後期の斜行溝SD2686等を検出している（『藤原概報 10』）。南側の耳成線第２次調査では、７世紀の大規模な整地事業があきらかとなり、藤原京期の井戸SE81、焼土や炭化物を含む土坑群、弥生時代後期の斜行溝SD61等が確認されている（『藤原概報 12』）。藤原京期の建物こそ未確認であるが、付近に藤原京期の遺構、そして弥生時代の遺構が展開すると予想された。

本調査の調査面積は608㎡。調査期間は2019年11月18日から2020年３月30日までである。なお、詳細は今後の整理作業を踏まえ、次年度に報告する予定であるため、ここでは概要の報告にとどめておく。

調査の成果　基本層序は耕作土、床土、その下に灰褐色土と褐色土（遺物包含層）となる。これらの土層を除去すると、地表下１ｍほどの深さ（標高82.0～83.0m）で、遺構検出面となるシルト層あるいは礫層となる。これらのシルト層や礫層は、弥生時代あるいはそれ以前の自然堆積層と思われる。

今回検出した主な遺構は、藤原京期の柱穴、藤原京期に埋め立てられた斜行大溝、弥生時代後期の井戸等である。斜行大溝は第27-7次調査のSD2690の延長部分にあたり、今回の調査では２条の流路が重複する状況が確認できた。また、その埋土から出土した多量の藤原京期の土器のなかに円面硯が含まれる等、遺跡の性格を考える上で注目される。このほか、平安時代以降の遺構では掘立柱建物、石敷、石組井戸、南北溝や東西溝等がある。

（和田一之輔・石田由紀子）

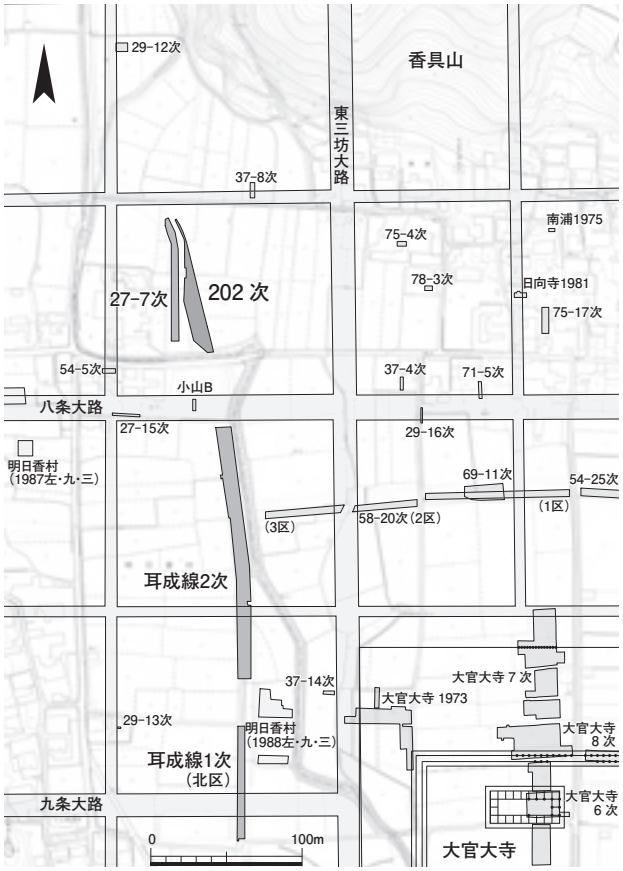

図128　第202次調査区位置図　１：5000

図129　第202次調査区全景（南東から）